弥生時代の大集落

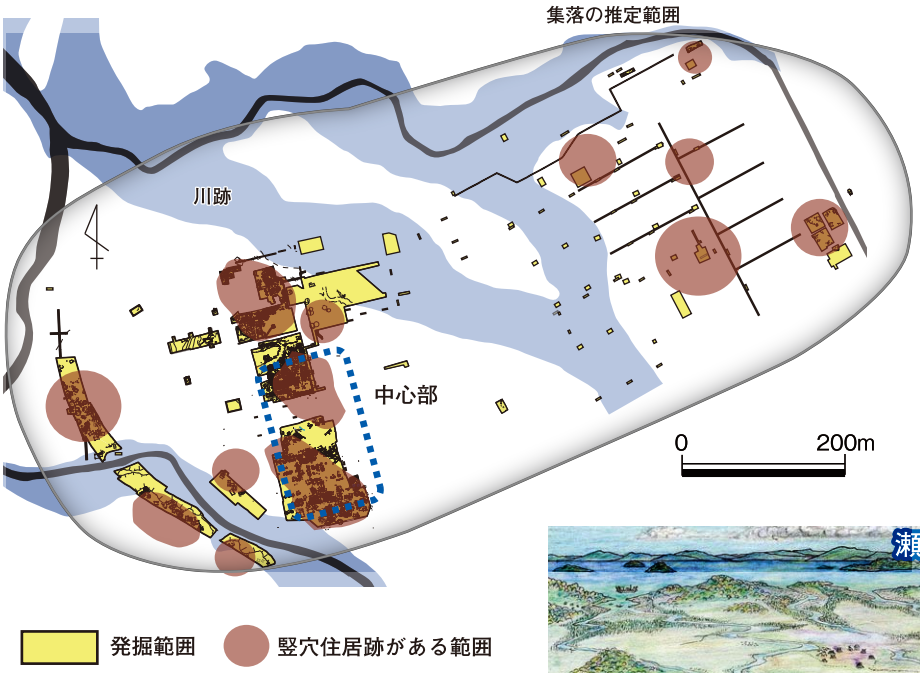
ー旧練兵場遺跡の発掘調査ー

旧練兵場遺跡は、様々な物資が交易される流通拠点であると同時に、「国」と呼ばれた政治的なまとまりの中心となる大集落です。旧練兵場遺跡が語る弥生時代像を最新の発掘調査成果から紹介します。

1 集落の大きさ

旧練兵場遺跡は、香川県善通寺市仙遊町に所在する弥生時代中期後半（約2,100年前）から古墳時代初頭（約1,850年前）を中心とした大集落跡です。遺跡の広がりは約45万㎡と推定され、これまで全体の約11%に相当する約5万㎡の発掘調査を行った結果、上記の時代に属する約400棟の竪穴住居跡を確認し、多くの人々が生活した様子が明らかになりました。

▲一括して出土した弥生土器
弥生時代終末期（約1,800年前）
28ℓ入りコンテナ約5000箱に及ぶ土器などの多量の遺物が出土しました。



▲遺跡の広がりと竪穴住居跡の分布
弥生時代終末期（約1,800年前）

遺跡景観の想像図▶
（弥生時代中期後半・約2100年前の様子を越智広二氏が作画）
竪穴住居は数か所の「微高地」と呼ばれる小高い場所につくられました。奥に流通の大動脈となった瀬戸内海が見えます。

2 長期間続く大集落

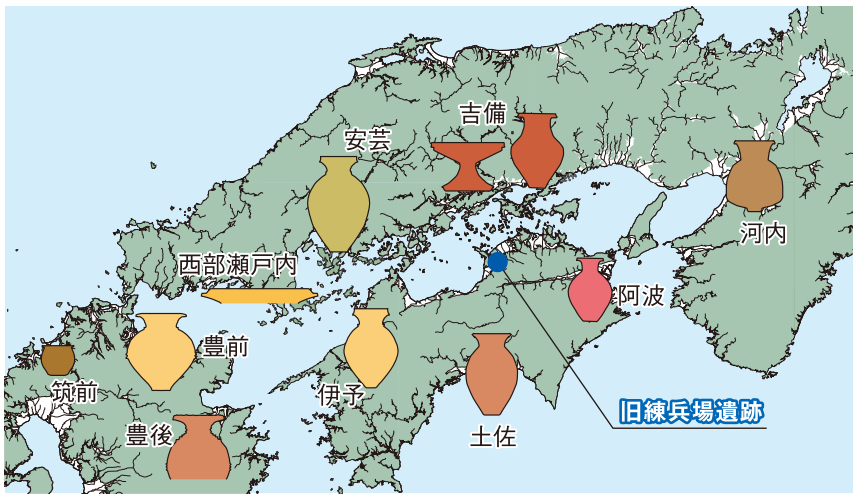
遺跡西部の集落の中心部では、弥生時代中期後半から古墳時代初頭にかけての約300年間にわたって、竪穴住居跡が連綿とつくられています。同じ場所に長期間集落を営み続けるのは、旧練兵場遺跡の特質の一つです。

▲ 繰り返して営まれる竪穴住居
弥生時代中期後半～終末期（約2,100～1,800年前）
古い時代の住居跡を埋め戻し、新しい時代の住居が連続してつくられています。

▲ 倉庫と考えられる掘立柱建物跡（ほったてばしらたてものあと）
弥生時代中期後半（約2,100年前）
大型の倉庫は、交易品を保管する機能をもっていた可能性があります。

3 交易の範囲

弥生時代後期前半（約1,900年前）を中心として、瀬戸内海沿岸や四国内の各地域から運び込まれた土器が約300点出土しており、旧練兵場遺跡の交易の範囲の広さを示しています。また、その出土量から、吉備（きび）地方南部（岡山県と広島県の一部）との関係が深かったことがうかがえます。



▲ 旧練兵場遺跡の交易範囲を示す他地域の土器の分布
弥生時代後期初頭～後期前半（約2,000～1900年前）

他地域から運び込まれた土器 ▶
弥生時代後期初頭～後期前半（約2,000～1,900年前）
土器は交易品ではなく、交易に携わった人間が移動した際に運び込まれたと考えられます。

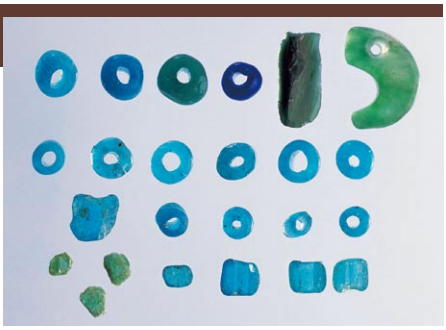
4 交易された品々

ガラス玉などの装身具や石庖丁、石斧などの農工具、銅鏃などの武器を始めとした様々な品が、交易品として集められました。特に銅鏃の出土量は63点に及び、列島で最大級の出土量を誇ります。

完成品の状態で入手したもの

▲ 銅鏃（やじり）
弥生時代後期～終末期
（約2,000～1,800年前）
入手先の違いが、様々な形に反映されていると考えられます。

▲ 石斧
弥生時代中期後半～後期前半
（約2,100～1,900年前）
結晶片岩製の石斧は南庄遺跡（徳島県）で製作されたものです。



▲ ガラス玉・勾玉などの装身具
弥生時代後期～終末期（約2,000～1,800年前）
写真右上の勾玉は北陸地方産のヒスイ製、管玉は碧玉製。

▲ サヌカイト製石庖丁
弥生時代中期後半～後期前半（約2,100～1,900年前）
サヌカイト原産地の金山（坂出市）周辺で製作され、ほぼ完成品の状態で運びこまれました。

原材料を入手し、集落で生産したもの

◀ 朱（水銀）の調合用の土器
弥生時代後期～終末期
（約2,000～1,800年前）
仙薬（不老不死の薬）調合や彩色用の顔料の精製につかわれた土器。原料の辰砂は徳島県の若杉山遺跡から運ばれた可能性があります。

◀ 鉄製品（斧・鏃など）
弥生時代後期～終末期
（約2,000～1,800年前）
素材を朝鮮半島を始めとした他地域から入手し、集落内で最終加工である鍛冶作業を行っていました。

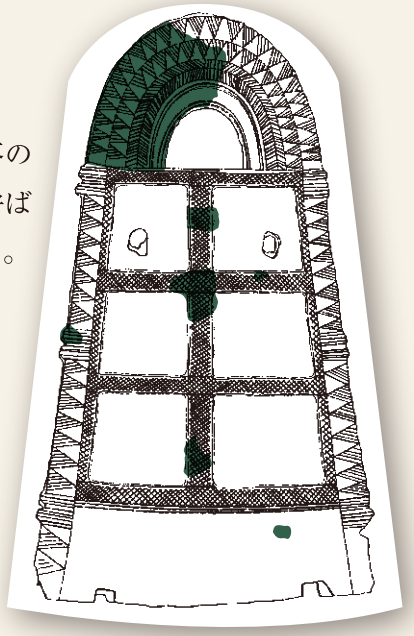
銅鐸の祭祀

銅鐸は弥生時代中期後半（約2,100年前）に製作され、集団・集落の結合のための祭祀品として使用されました。扁平紐式の「名東型」と呼ばれるもので、徳島県や香川県などの四国の東北部に多く分布しています。

▲ 銅鐸片（紐）

◀ 銅鐸片（身）

7点を数える破片の状態で出土していますが、集落内に完全な状態で埋納されていた銅鐸が古墳時代など後の時代になって破損したと考えられます。



▲ 銅鐸復元図
名東遺跡（徳島県）出土銅鐸に合成して表示
高さ39cm　s=1:5

5 大陸との交易

鏡は、弥生時代終末期（約1,800年前）頃から登場し、有力者の社会的地位を示すものと考えられます。

内行花文鏡や方格規矩鏡など後漢製の舶載鏡と、北部九州など列島内で製作された仿製鏡が見られます。特に舶載鏡は、朝鮮半島などの大陸側との交渉によって入手した可能性を示しています。

また、舶載鏡をもつことによって、大陸王朝の権威や国際的交易力を示す意味があると考えられます。

●は仿製鏡、他は舶載鏡

◀ 旧練兵場遺跡に集中して出土する鏡

▲ 方格規矩鏡片
覓（鏡）の銘が見える
後漢前期～中期
（約2,000～1,900年前）

※後漢・・・・紀元後25年から220年まで続いた中国の専制国家

6 旧練兵場遺跡から見える弥生時代社会

旧練兵場遺跡は、人・モノが集まる交易の拠点としての大集落でした。また、その交易の範囲は環瀬戸内海地域を越え北部九州地域まで及ぶ商業交易をも感じさせるものであり、『魏志倭人伝』の「倭国の国々には市があり・・・・」の記述を彷彿とさせます。集落は、弥生時代後期から終末期（約1,900～1,800年前）にピークを迎えるとともに、大陸との交渉を担うことが可能な大集落に変質していきました。旧練兵場遺跡の調査成果は、広域の交通網や物資交易の基盤が整い、大集落を中心とした「国」と呼ばれる政治的なまとまりを生み出すに至る弥生時代の社会の歩みを物語っています。

弥生時代の大集落
―旧練兵場遺跡の発掘調査―
2010年（平成22年）8月31日発行

編集・発行　香川県埋蔵文化財センター
〒762-0024香川県坂出市府中町南谷5001-4
Tel:0877-48-2191　Fax:0877-48-3249
E-mail:maibun@pref.kagawa.lg.jp
http://www.pref.kagawa.lg/maibun/